伊丹公103102　2面　尚❶奥❷井❸井❹井❺尚❻奥❼尚❽尚

市高商業科「言の葉カフェ」を営業

おいしいコーヒーとくつろぎの空間を提供

笑顔でコーヒーを提供する生徒ら

市立伊丹高校商業科の生徒39人が、授業の一環として9月28・29両日、伊丹郷町館旧石橋家住宅で「言の葉カフェ」を営業、2日間で160人を超える客でにぎわった。

スイーツの商品企画や販売商品の選定・仕入れ、ブログやポスター制作などのPRといった事前準備に約5カ月かけて臨み、店名は「ことば文化都市伊丹」にちなんで生徒たちで決めた。

一番人気は有名カフェの「バターブレンドコーヒー」。注文を受けてからコーヒー豆を挽いて一杯ずつ提供していた。焙煎したコーヒー豆にバターをしみ込ませた、酸味の少ないまろやかな味わいが特徴。ブラックで飲んでも甘みがあり、好評だった。

また伊丹市東野産のサツマイモを使って市内の洋菓子店『フランダース』と共同開発した「いもいもタルト」も販売し、人気を呼んだ。

店内には、小学生から募集した俳句100句の中から選ばれた12句を展示。人気投票を実施したほか、福笑いや折り紙など、子どもたちにも楽しんでもらえるスペースも設けた。

副代表の松本のどかさん（18）は、「コーヒーを飲みながら非日常な空間でゆっくりくつろいでもらいたいというコンセプトでスタートしたが、先輩たちから引き継いだこと以外にも、一から考えた企画をクラスで作っていこうとした時、さまざまな意見が出てぶつかり合った。それをまとめるのにとても苦労した」と話していた。

今回のようなカフェは商店経営実習の一環で毎年開かれており、「昨年より生徒の接客は向上したが、混雑して注文を受けた順番が分からなくなり、厨房が混乱する場面もあった。まだまだ改善の余地がある」（浦門義人・市高商業科科長）。

当日のカフェには2年生もエプロン姿で参加していた。今年の課題を活かし、来年はどんなカフェになるのだろうか。今から楽しみだ。

（龍田　起代子）

郷土史こぼれ話㉕

若山牧水の「白雪」エッセイが興味深い

6年前にも触れた話だが、酒の季節になると何度も書きたくなる。

旅と酒を愛した若山牧水は、大正3年（1914）、早稲田同窓・歌仲間の桐田蕗村（そのころ池田市在住）に招かれ伊丹にきた。その一夜が忘れがたく清酒「白雪」エッセイを残した。以下、それを拝借し筆を進めたい。

「数年前。大阪に四五日滞在して居たことがあった。滞在の終ろうとした前日、創作社ゝ友であったK－君が二三の青年紳士と共に私を訪れて、大阪の酒にはもう大概お倦きでせうから今日は一つ変わった所で一杯やりましょうと、誘ひたてた。（中略）　促されて降りた停車場の立札には「いたみ」とあった。はゝァ、と思ってるうちに我々は寧ろ奇妙な巷路に歩み入った。町といひたいが、巷路の方が相応しい。路は唯だ真白な、冷たい、広大な白壁と白壁との間を通ってゐるのである。それが随分続いた。いずれもこれには酒が満ちてゐるのだと聞いた時、期せずして私の胸は波打った」。

若山牧水（公益社団法人沼津牧水会提供）

そして、蔵と蔵の間にある料理屋に上り、

「今日はこの伊丹中でも出来るだけの酒をお勧めしますから一体どれがお口に合いませうということであった。その時これがいいと云ったのだろうと思はるる白雪の酒が先日はるばるとこの三浦半島まで送られて来た」。

そして後段は、その白雪を受け取る話になるのだが…。

「この村までは鉄道便が利かない。で、横須賀にいる友人に取次いで送ってもらうことに手筈をきめて、サテ一日千秋の思ひで待ち受けたがなかなか来ない」。

たまりかねて道程四里の駅まで出かける。折から到着。友人は荷造りを解けという。顔を赤らめ峻拒したが可哀相になって、「後日僕の村までやって来たまえ、その熱心があったら御すそ分けしよう」と抱えて帰る。まさか来はしないと思った友人が、数日後、おかずを抱えてやってくる。

「トウ〳〵ほんとに来たのか。実はあんまりうまいので済まないと思ひつつ、大方もう平らげたのだが幸いに少し残って居る、と云いながらその日は非常によく晴れてゐたのでそのまま二人を誘って、その酒をば四合瓶一本（実はまだ沢山あったのだ）、他は土地の酒屋から取ったのを提げて前の濱の松林に出かけて行った」。

さすが牧水、飲みたい白雪は離さない。

かくして「津の国の伊丹の里ゆはるばると　白雪来るその酒来る」（注；エッセイのなかでは「伊丹の町ゆ」としている）など7首の白雪讃歌が生まれた。

こう歌われると伊丹人は、牧水の気持ちになって、上戸も下戸も杯を挙げずにはおられない。

「白玉の歯にしみとおる秋の夜の　酒は皆で飲むべかりけり」と相成った。

（郷土史研究家　森本　啓一）

蔵だより　ニュース

宮本輝の小説の世界をしおりに追手門大生らが著書をPR

ことば蔵は9月8日、本市在住の芥川賞作家、宮本輝さんの作品「青が散る」と「彗星物語」をモチーフにした「宮本輝の作品で透明なしおり作り」を開催、小学生ら101人が制作に取り組んだ。

「青が散る」は、大阪府茨木市の新設大学に入学した主人公が友人たちとテニス部を創設してテニスや恋に夢中になる姿や友人たちの抱える闇を通じて青春の光と影を描いた作品。新設大学とは追手門学院大であり、学内には小説に登場する有名な場所が今も残る。

「彗星物語」は、12人と犬1匹の大家族である城田家が、ハンガリーからやってきた留学生を受け入れたことで起こる騒動を描いた作品。伊丹市が舞台となっており、昆陽池など市民なじみの地名が登場する。

今回の催しは、ことば蔵インターンシップ生である追手門学院大生3人が「宮本輝さんの作品を身近に感じてもらうきっかけを作りたい」と企画した。

透明なしおりとは、裏面が透けて見えるしおりのことで、両作品の舞台を撮影した8種類の風景写真と、画像を転写できる特殊な透明フィルムが材料。フィルムの片面に写真を貼り付け、水の中で余分な紙を時間をかけてこすり落とす。最後にもう片面にフィルムを貼り付けて完成させる。

イベントに参加した有岡小学校1年の樽岡実紀さん（6）は、阪急伊丹駅の写真を選択。「こする作業が大変だったけど、大学生のお兄さんやお姉さんが助けてくれた。またやってみたい」と元気に話してくれた。

また、企画した高木蘭奈さん（20）は「PRや進行の仕方など、1カ月のインターンシップ期間にとても悩んだ。ふたを開けると予約が殺到し100名以上に来てもらえびっくり。しおりを3枚作る子もいて、楽しんでくれている様子が伝わった。企画してよかった」と笑顔を見せていた。

ことば蔵では、12月から、2階の「伊丹作家コーナー」で、追手門学院大「宮本輝ミュージアム」提供の「青が散る」、「泥の河」関連資料や、今回作成したしおりを展示予定だ。

透明なしおり作りに取り組む子どもたち

この印刷物は1万5000部作成し、印刷経費は1部あたり26円です。